

## 国立民族学博物館の収蔵品⑬

## タイの仏像

国立民族学博物館の東南アジア展示場には、高さ約一メートル、重さ一四〇キログラムほどの仏像がある。特別なわれがあるものではなく、すぐれた美術品というわけでもない。タイの寺院でごく一般的にみかけるタイプの仏像だ。二〇一四年一月、タイ北部チェンマイの仏具店でわたしが購入してきた。

仏陀とはすべての煩惱を打ち消し、真理を悟った人のことである。仏陀は複数存在するが、通常、われわれが話題にする仏陀とは釈迦のことであり、紀元前五世紀頃に現在のネパールあたりに実在した歴史上の人物である。世界にあるほとんどの仏像はこの人物を表しているが、その容姿は造られた時代や地域によってさまざまだ。

国立民族学博物館の仏像はスコートイ様式と呼ばれるもので、卵形の顔、弓状の眉毛、女性的な体軀などがその特徴である。蓮の花の台座の上に座禅を組み、両手をへその前で重ねている。左肩から右脇下にかけて一枚の布をびったりと巻き付け、それが両足までほぼ覆い隠している。瞳は伏し目がちで、静かに微笑んでいるようにもみえる。

仏像はさまざまなポーズをしているが、作者が好きなようにつくるといってわけではない。それぞれのポーズは釈迦の人生における重要なエピソードを表している。国立民族学博物館の仏像は、悟りを開いたとき（禪定）の仏陀である。これは、悪魔を追い払ったとき（降魔）、入滅するとき（涅槃）とともに、タイではもっとも人気が高いポーズの一つである。

来館者は靴を脱いで絨毯に上がり、仏像の前に座ってお祈りすることができる。真鍮製の身体は、下からのスポットライトと、天蓋に埋め込まれた電球からの光で、キラキラと黄金に光り輝いている。いままさに釈迦が真理に目覚めようとしているかのようだ。仏陀の表情はみる角度によって微妙に変化



タイの仏像

する。仏像は蓮の花をデザイン化した、高さ一メートルほどの白い台座の上に置かれており、下から見上げると、じつに慈悲深いまなざしを感じる。

二〇一五年三月、国立民族学博物館でこの仏像を公開したとき、当初は展示場で「魂入れの儀式」を計画していた。タイでは寺院に新しい仏像が寄進されると、数名の僧侶を呼んで、かならず魂入れの儀式を行う。仏陀の神聖な力を迎える儀式であり、この儀式が行われるまで、仏像はただの物として扱われる。

しかし、結局、国立民族学博物館では魂入れの儀式をしなかった。というのは、仏教美術の専門家であるタイの友人がこういったからだ。「儀式をしてもいいですよ。でも、儀式をしたら、それ以降は仏像を仏陀としてちゃんと扱ってくださいね。毎日、かならず供物や線香をあげて敬意を示してください。もしこれを怠ると、博物館に災いが起きるかもしれませんよ。」（平井京之介）